なんかもうどうでもよくなってきた

21144444

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なんかもうどうでもよくなってきた

【Ｎコード】
Ｎ５３０９Ｙ

【作者名】
２１１４４４４

【あらすじ】
アルバイトしてたら前後左右が炎だったよ！外に出たら下が崖でした！
ＯＫなにこの冗談意味わかんないとか思ってたら神に出会ったから転生してもらうことにする。さて、楓ちゃんとはもう出会えないし新しい出会いをして平和に暮らさなければ！…え？無理？

プロローグ（前書き）

テンションだけで書いた、後悔はがっつりしているけど、何故か投稿した。

プロローグ

真っ赤な世界、それは幻想的だった。
正直いうと、熱さに問題ありというところだが、まぁ仕方がない。
だっているところが燃えてるんだもん

「ｗｈａｔ' ｓ　ｈａｐｐｅｎ！？」

とりあえず叫んだ。

――頭の冷却完了

――思考を冷静化

――現状確認開始

――右をみる、火だ

――左をみる、火だ

――前をみる、火だ

――後ろをみる、火だ

――現状確認完了

――ＯＫ　絶望的

「…嫌だァァ！？」

『現状を確認してみたら絶望的だったでござるの巻』

忍者ハットリ君だったら現状を切り抜けられるとか思ったら変なタイトルがわいてきたよ、とりあえずどうするべきかな？
そう思って思い至ったのは、ドラマである水をかぶって火の中に突入するシーン

Ｏｈ！ｇｏｏｄ　ｉｄｅａ！

「そうと決まれば水だ！山奥にきたんだから水ぐらいもってきてんだろ！」

そう、この現状は山奥の小屋にアルバイトできていることからはじまる
三日住むだけで１０万円！とそこはかとなく呪われている感しか感

じられないが、金欠だった俺はアルバイトをすることに決めたわけだ。
…でこの現状だ
もってきたバッグを漁ればやわらかいもの、ペットボトルだ。

「とったどォォ！」

ハイテンションでそれを外に出す。やったねたえちゃん！
でてきたペットボトルをみる
『コカ・コーラ』
ここに来るときの俺の思考に対して殺意が湧いた

背に腹は代えられない、そう思ってコカ・コーラのキャップを開けてひっくり返す。
ジョボッ
…
……しょぼいというか最悪な量の上一瞬で蒸発して砂糖のみのこるべとべとする
不快感マァァアッックス！

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@」

意味不明の言葉を発して今の怒りを表現する、今の俺をみれば…そう人類全員が警察をよぶだろう。
地団太を踏んで怒りを解消すれば、すぐに冷静に慣れた
目の前をみる
オゥイェエエエィ
轟轟と燃える炎、その迫力はすさまじい
だがそれ故に燃え尽きるのも早い
つまり、だ

今見ている壁ももろくなっている可能性が高いということだ
それに希望を感じ壁をにらむ

「フッ…俺の一撃を見せてやる！シャイニングゥゥゥ！」

以下省略
…色々とやってみたが、壊れなかったのでキレてその場にあった金槌を投げれば壁が壊れた。
俺の努力はなんだったのだろう、張り手をかました手が痛い
なんだか死にたくなってくる。つうか壊した瞬間にちょっと爆発したぞ

「まぁいいや、いくぞ！俺！かえったら楓ちゃんに告白するんだ！」

楓ちゃん、大学の友達で美人だが暗い女の子だ。
それ故にあまり人に近づかれないが、話してみたらいい子だった。
――それ故にズッキューンッてきた。
そして今まさに後悔している。
死亡フラグをたてたんじゃないかと
突撃開始をしているために止まれない、というか止まったら死ぬんじゃないか？

「うォォォォォ！」

風になるような気分だった
恐ろしいくらいに風を感じる
冷たい空気、そう俺は外に出たのだ
青々と茂る目の前の世界に涙がでる
――そして俺は

落下した

崖ですかぁ
死亡フラグたてたのが原因？そんなものなの？っていうかそれが原因だろ、っていうか何で火事とか怒ってやがんの意味不明、楓ちゃん楓ちゃん、とりあえず俺どうしたらいい？うん本気でそう思うんだけど
そう思っていると携帯の音が鳴ったので携帯を取り出す
愛する地面へと感動の再開までまだありそうだ
開けてみると楓ちゃんからのメールだった。

『いきなりこんなメールしてごめんなさい、でも決めたから言おうって思ったんです。明後日、いっしょに帰りませんか？そこでいいたいことがあるんです。』

…あぁ～
なんだろな、うん、告白だったらいいなぁ
うんでもね、無理です
うん無理～
うははこの世界なんて滅んでしまえ

「バルスッ！」

ぐしゃっ

プロローグ２（前書き）

とりあえずプロローグだけ終わらせる。
でも本編はいけるかどうかわからない。
知識が２０巻までの上、にわかすぎて死ねる。

プロローグ2

中学生の女の子
ショートボブの女の子

「やぁ僕神様」

さて、俺は何故ここにいるのだろうか、訳が分からないよ

「あ、落下したのか」

そう考えてたら思い出す、ちょっと前のことだった。
そしてこれは落下地点か、そうかそうか

落下してバルスッって叫んだのを思い出せるよ

「そして俺は空中三回転ひねりをくりだし――華麗に着地をして今に至ると」

「はいはい、そんなことを思っていた時期もありましたね」

手をひらひらさせて呆れたようにいってくる…えっと亜美さんだっけ？

「ちっがーう違う違う、どれだけ違うというならラーメンとソーメンくらい違う！」

大きな違いを見いだせない俺が馬鹿なのだろうか、それともこいつが馬鹿なのだろうか

おそらく後者だ

「加美様？女王様って自分でいっている痛い子？」

「ＯＫィィ、分かった、君の現実逃避能力スキル全日本選手権第一位を総なめするその能力はよくわかった、とにかく話が進まない、現実を受け入れるんだ。」

「加美様…お前がナンバーワンだ。」

「なにその野菜王子みたいなセリフ、まったくうれしくないうえに理解しようよ、君は死んだんだゴートゥーヘヴンなんだ。」

「そこはｙｏｕ　ｄｅａｄっていえよ、うんごめん、加美様はわざとなんだよね？女王様ァ」

「やめてよ！間違ってないはずなのに恥ずかしいよ！っていうか話を聞いてよ！泣くよ！？泣くよ、この中学生という年齢のいまだ幼さ残るプリティーフェイスで泣いちゃうよ！？この世の我が可愛さにより奴隷志願してくるようなやつらが波となって押し寄せてくるよ！？嫌だよね？嫌だよね？だったら話を聞こう！」

「…それは嫌だな、よし！話は聞かない」

「よっし話がススマネェェェエ！」

「『加美様はノリツッコミを覚えた！』」

「うォォォォ！話を聞きやがれェェェ！」

さっきまでの元気っ娘みたいなノリはどこにいったのやら

…おちょくりすぎたのかもしれない

――やれやれ

「わかった、わかったよ話を聞いてやる。」

「え、ホント？」

「ただし三文字以内だ」

「聞くつもりさっぱりねぇよこの糞が！」

「わかった、六文字だ！」

「二倍になってもできないよ！？臥薪嘗胆とかそういう感じの深い意味がある言葉を使わなきゃ不可能だよ！？」

「使えよ」

「つかえねぇからいってんだよォォ！」

…ふぅ、いい加減疲れてきたな

ちゃんと話を聞いてやることにしよう

「べっ別にあんたのために聞いてあげるんじゃないんだからね！勘違いしないでよね！」

「はいはいワロスワロス」

「べっ別にあんたの「しつけぇ」…」

加美様とやらの変貌ぶりに驚くしかない

「絶望した…アイドル系の表と裏の違いに絶望した。」

「…」

「ハッどうせ女なんて裏表あるビッチなんだよ、ケッ」

「…オォォォォォオオオオオオオオッ！もう一度死にたいかァァァァ！」

Ｏｈ、カミサマ、オコッチャイマシタカー？

「チックショウ、アタイは神様なんだぞ偉いんだぞチクショォォ…美しい女神さまなんだ…」

「ハイハイワロスワロス」

ブチンッという音が女神殿から聞こえたがスルーしようと思う。

「メアリー、なんで僕はここにいるんだい？ＨＡＨＡＨＡ」

「なんだそのホームドラマな感じは…」

「オット、それはいっちゃいけないと約束したじゃないか、メアリー」

「つーかメアリーじゃないよ、女神様か神様って呼べよ」

「ＨＡＨＡＨＡ、わかったよメガミー」

「なんかメアリーと同じ感じに言われた!?」

「さて、女神様、君の話を聞かせてくれるかい？」

「…もういいよ、話が進むならそれでいい、単刀直入に言うと転生しろってことなのさ。」

「そして俺は空中三回転ひねりをくりだし――華麗に着地をして「死んだから、うん死んだからね」…わかってたのに何をいってんだ？」

「うわうっぜ、こいつううっぜ」

「まぁいいさ、ふぅっそれで、転生しろって?それなんてテンプレって言ってもいいかい？」

「いいよ別に、能力を願えよ。最強になれよバーカバーカ！」

「じゃあナデポ」

「そこでそれかよ！」

ほかに何を願うっていうんだい女神様。
もてない男がもてる主人公にたいしてハンカチを噛んで殺す、殺すと考えるのは普通だから

「普通じゃないから、むしろ異常だから」

「何故心を読んだ…まぁいいさ、よくわからないけど、そのいく場所にあるもの全部ありえへんことになってればいいよ。」

「うわアバウト、だけど理不尽なほど簡潔的かつ絶対的最強になる願い。」

「で、なんでもやれればそれでいいや。」

「うわアバウト、だけど理不尽なほど完結的かつ絶対的最強になる願い。」

「それで完了だよ。」

「…なんていうか、転生理由とか目についたからなんだけどここまでおかしなやつを選んだ私って運がよいのかな？悪いのかな？」

「運？まっくすうれぴーとでもいってればいいんじゃないですか。」

「いやだ、もう送る、もういや」

「そう？じゃのんびりと純愛を楽しむからハンカチかんで妬ましやっていっててください」

「イラつく…その敬語がイラつく…ナデポ願っといて純愛願う時点でむかつく…」

そういう俺が目をつぶると…世界が反転する。

暗いくらい世界へと入り…暗いくらい世界へと出る

「…は？」

いたのは、深い森のような場所だった。

第一話『森の中らしい』

ガキィン、ギュィンッという音が森に響き渡る。

「刹那ッ！」

「あぁっ！」

ドンッという銃の音さえも混じり、刀が月の光を反射し、たまにキラキラと光る

――ただいえる

「なぁにこれぇ」

と、だけ。

気が付いて周りを見回し、そして見つけたのは学生証、おそらく俺はこの学校の生徒なのだろう。

そしてこれは憑依、というものだ。

帰り道がわからないことに呆然としていると、音が鳴る、人がいるのか！？と感激して向かえばこの光景。

非常識だ、俺がいったらおそらく全人類にリンチにあうと思うけど

「ッ――数が多い！」

おやおや片ポニ御嬢さんが頬に汗をたらして苦しそうな声を出す。

後ろにいる褐色な…お姉さん？もつらそうな顔をしている。

――これは助けたほうがいいかもしれない、だけど介入していいのか？

刀でズバーッてきたりしない？怖いんだけど

「百烈桜華斬！」

おやなんか技を繰り出し消滅させたぞ？大丈夫そうだな…頭くらいある石を持っていたんだが、必要なさそうだ。そう思って放り投げるように上に投げる。

――自身の力をまだ知らなかったようで、石は軽々とポーンと飛んでいく。

「ちょ、うそだろおい！」

そう思ってあちらにいる少女たちがいるところに、それは起こった。ひゅうんひゅうんと加速していき、石は下へ落ちる

そのときだ、暗闇から巨大な影がでてくる

「なッ！？奇襲か！」

片ポニや褐色が驚いているが、冷静に対処すれば大丈夫だったのだろう、すぐに刀をもった少女は握り、刀を振るおうとすれば、腕をつかまれる。

「な――！」

いつの間にか、横にほかの鬼がきている、そのうえで…自分の刀を掴んでいるのだ、

「はな――！」

離せ、そう叫んで無理やり切り裂こうとして、気づいた。

――逃げられない

「ごめ――ね、この――ん」

ごめんね、このちゃｎ、親友の少女の昔の呼び名で呼び、謝る。
護りきれなかった、それが心に突き刺さる、だがその苦しみもわずかだろう…私はもう死ぬと彼女は悟っている。
――だが奇跡が起きた。

『グァァッ！？』

俺が投げた石が、鬼に直撃した。
攻撃をしようとした腕が止まる、それに気づいた少女は、刀をつかんだ鬼を切り裂き、巨大な鬼をさらに切り裂く。

「…危なかった…」

「刹那、大丈夫か？」

「ああ…だけどこの石はどこから」

そういって刹那といった少女はぐるりと周りを見回し…俺と目があった。
視線がピリピリしてくる、これが警戒心をもった視線というものだろうか

「何者だ！？」

――こういうときに俺はどうしたらいいのだろうか
うん、決めた

「うわーん！ドラえもーん！刀をもった美少女と銃をもった美少女？が襲ってくるよォ！」

「あ、ちょ！」

「なんで今私のほうは疑問符をつけられていたんだ？」

後者の声から殺気が見える！今すぐ逃げなければ！…えっと加速スイッチＯｎ！

「ま、待て！って速っ！？」

「すごい速さだな…魔力の類は感じられはするが、そこに熟練した感覚はない、魔力はあるが関係者ではないといったほうが適格か。」

「それのほうが問題じゃないか！？」

「そもそも刹那があからさまな警戒心をもったことが悪いんだろう？」

龍宮の言葉に何も言い返せない、そしてすでにあの少年の姿はない。

――助けられたということを一瞬でも忘れていた、…悪いことをした。

「…ぐっ、も、もう見えない」

「仕方がない、学園長に報告して帰ろう。」

「…そうだな。」

また会ったらお礼をしよう、それで色々と聞かなければ、そう思って学園町室へと歩き出す。

――また逢えたらいいな、そう思う。

――主人公ｓｉｄｅ

生徒証をみる、名前は『天音　光輝』

ある程度走り回った後に後ろの二人の気配がなくなったので一息ついた。

「うぅっ、わからん。」

「ほう、なにがだ？」

「（転生後の）俺が何者かさっぱりわからん。」

「それは記憶喪失というものでは？」

「考えてみれば（記憶がないわけだし）そうだな、帰り道がわからんからどうすればいいんだろう…って誰！？」

振り向けば、西洋人形のようなきれいな少女がそこにいる。
金髪の長い髪がサラサラとなびきながら、後ろには緑色の髪色をした長身の少女がいる。

「なんという美少女二人組」

そう本心を告げれば小さなほうの少女が顔を赤くする。

「なにをいきなりいっているんだキサマは！」

「なにって、本心？」

「ッ…話が進まない、勝手に進めるぞ、で、お前は記憶がごっそりないということでいいな？」

「いいんじゃないですか？」

「軽いな、自分のことだというのに、もっと驚かないのか？」

「何が変わろうとも俺は俺ですからね、ま、それでいいんじゃね？
過去なんて知らないし、今を生きれば十分でしょ。」

そういえば、笑い始める金髪美少女、幼女といってもいいかもしれない姿だが、風貌は大人っぽい
その笑い続ける状態に呆然とするしかない俺

「ついてこい、一晩ぐらいは泊めてやる、明日学園長に合わせてやる。」

「なんという優しき少女だな、完璧だ」

「おいていくぞ！」

「こちらです。」

おいて行かれそうだ、さっさと行かねば

――エヴァンジェリンｓｉｄｅ

「マスター」

「なんだ？」

従者である茶々丸がチラッと後ろをみて聞いてくる。
おそらくアイツのことだろう

「よいのですか？泊めるなどして」

「別にいいだろ、アイツに殺気は感じられなかった、まぁあったとしても軽くひねってやるがな。」

「…そうですか。」

漏れ出すほどの魔力、気、だが感じられるのは実力者の程ではない。実力者の力を隠せるほどであれば苦戦するだろうが、この学校の生徒であることは学生証からでもわかっている。そして記憶喪失といった事柄も嘘ではない可能性が高い。
こちらに確実に気づいてなかった上に独り言をきいたのだ、嘘である可能性が非常に低いといえる。

さっさと明日学園長に引き渡してやろう、そう思いつつ家へと向かった。

――主人公ｓｉｄｅ

家に入れてもらった、不思議と甘い香りがすると思うのは俺の勘違いだろうか。

「女の子の家は初めてだとおもうのでドキドキします。ファンシーなログハウスといったところでしょうか、人形の多さも目につきますが、かわいらしい趣味だということで結論をだしましょう」

「誰に説明をしてるんだお前は…って家の匂いを堪能するのをやめろ気色悪い！」

「マーキングしてもいいですか」

「つまみ出すぞ！」

「ごめんなさい」

言っといて変態すぎると理解した。

大丈夫か俺、テンションおかしいぞ俺…まぁいつものことだけど

「美少女の家とはこれはこれはいただきます。」

「どこを食うつもりだ貴様は！…でどうするんだお前は、これから。」

「学園長室にいきます。」

「ああ」

「金を奪います」

「待て！、さっそうと犯罪に手を染める宣言をしてるんじゃない！普通は部屋を探してもらって親の電話番号を教えてもらった後に病院にいかせてもらうとかだろうが！」

「おお！」

「おお！じゃない！それが普通だ！」

「いやわかってたんだけど、なにいってるの？」

「うがぁぁああ！」

ぶっつんとしたらしい、なんて短気な少女なのだろう、美少女が台無しだ。
後ろの長身美女が、『あぁマスターなんて楽しそうな…』とかいってるけどおかしいんじゃないだろうか。

「まぁ今日は寝かしてもらうよ、落ち着いたら寝なさい、よい子は寝る時間ウヴォァ！！」

蹴られた

第一話『森の中らしい』（後書き）

テンション壊れ気味。
全力でぶっ壊れてみる。

主人公をｆａｔｅ的に強さを教える（前書き）

というか、たぶん簡単に教えられるのがそれしかない

主人公をｆａｔｅ的に強さを教える

【真名】天音光輝
【性別】男
【属性】混沌・善
【身長】１６６ｃｍ
【体重】５８．２ｋｇ
【ステータス】
筋力Ａ＋＋　敏捷Ａ＋　耐久Ａ＋　魔力ＥＸ　幸運Ｄ　宝具　－

【固有スキル】
直観　Ｃ
戦闘時に限らず、最適な展開を感じ取る能力。判断力と共にこれぐらいあれば怪しまれない。

魔力放出　Ｃ
魔力放出、というよりも力任せに吹き出す感じ。だから必要じゃない魔力もつかってしまうし、気を付けなければ吹っ飛んでしまう。

魔術　ＥＸ
魔術という域を出ている。すでに奇跡という域。
…いや神の奇跡のようなものですけど

動体視力　Ａ
動きを見極める能力、戦闘能力が低いので見えて避けられてもその攻撃を利用するなどの戦術はできない。

マイペース　Ｃ
どんな時でも自身のペースを忘れない。高すぎるほどに迷惑である。

【宝具】
魔術そのものが宝具の域なため、そういえるものは存在しない。

魔力、魔術ともに常識など完全無視したレベルだが、戦闘能力に関しては低い。
そのために、動体視力が高くとも、瞬発力が高いのでよけられるが、反撃などはできない。
戦い方は未熟だが、やはりスペックが高いために補っている。
才能も高いために、これから伸びる。
能力は『考えたものをできる』能力ではなく『知っている能力が使用可能になる』程度の能力なので、調節や強化に関しては修行次第。

筋力、耐久、敏捷などは、この世界『では』ありえない程度の能力。
魔力、気の力関係なしに大地を割ることができるし、殴られてもすぐに起き上る。
動きも早いが
結局は気、魔力のある人物と戦うと負けることもある。

本格的に強くなることを決めれば、勝率は格段にあがる。

主人公をｆａｔｅ的に強さを教える（後書き）

ー暇だからｆａｔｅのステータス表示で考えてみたシリーズー

【真名】右代宮　戦人
【ＣＬＡＳＳ】キャスター
【性別】男性
【属性】中庸
【身長】１８０ｃｍ
【体重】
【ステータス】
筋力Ｅ　魔力Ｄ
耐久Ｅ　幸運Ｃ
敏捷Ｅ　宝具ー

【クラス別スキル】
陣地作成　ー
魔術師ではないのでこの能力は消えている。

道具作成　ー
魔術師ではないのでこの能力は消えている

【固有スキル】

戦闘続行　Ａ
屈しかけたとしても再び復活する能力、時間はかかるがどんな状況下でも復活する。

覚醒　A
屈しかけたときに発動する。回数制限あり、全ステータスをあげて再び舞い戻る。

反撃　C
自分に不利な環境、もしくは敗北しかけているときに発動、一時的にステータスがあげる。

黄金の魔術師　A
召喚魔術、ともに魔術が使用可能となるスキル。
多種多様な召喚が行える。

魔術　B
黄金の魔術師が追加された瞬間に追加される。厳密にいうと右代宮戦人は正当な魔術師とはいえない。

【宝具】

『エンドレスナイン』
ランク：A＋　種別：？？？？　レンジ－　最大補足－
魔術、宝具例外なく無効化する壁。
物理攻撃に対しては効果がない。
覚醒が一度発動したらこの宝具は追加される。

『青き真実』
ランク：C　種別：対人宝具　レンジ－　最大補足－
魔術師に対してランクは一段階あがる。
対魔力の抵抗は訪れず、杭、剣など多種多様なタイプがある。
覚醒が二度起こした時に宝具として追加される。

『赤き真実』
ランク：Ｂ　種別：対人宝具　レンジ－　最大補足－
剣、杭などのタイプがある。
覚醒が三度起こした時に宝具として追加される。

『黄金の真実』
ランク：Ｃ＋～ＥＸ　種別：対人宝具　レンジ－　最大補足－
剣、杭などのタイプがある。こめる魔力によって無限に威力をあげる。
黄金の魔術師のスキルが追加された時にスキルとして発動する。

『黄金卿』
ランク：ＥＸ　種別：？？？？？　レンジ－　最大補足－
固有結界、家具並びに右代宮家全員総出でお出迎えする。
お出迎えという名の虐殺。
この中ではすべてのものが生き返る。

【武器】
自分の持っているものとはいえないので付け足してみるだけ

『煉獄の七姉妹』
七つの大罪をモチーフにした七姉妹を召喚する。
黄金の魔術師スキルがなければ召喚不可能。

『ゼパル・フルフル』
愛によって強くなる二人。
愛を魔力に変換し、戦人の魔力を回復することができる。

実を言うとＦａｔｅ／ｚｅｒｏで雁夜さんに召喚させる小説を書いていた時期がある。
小説内では、エンドレスナインは対ギルガメッシュ宝具として存在する上に、キャスターのクラスの上、エンドレスナインは魔力を必要としないことから、ギリギリな状態になりながらも最後まで行く、途中間桐臓硯をエンドレスナインを令呪をつかって拡大し消滅させるなんて意味不明なことをやっていたり、時臣を死にそうなところを救って、最後に和解させたりしていた、桜自体は間桐の姓を返さないなんてよくわからないことをしていたけど。
あのコンテナだらけのところで一度の覚醒、ギルガメッシュをちょっと圧倒したり、バーサーカーやアサシンにぶっ殺されたりして、最後の最後にギルガメッシュと戦い、令呪を使って黄金の魔術師へと覚醒させ、雁夜は戦闘中に魔力が尽き、色々あって遠坂家の面々がいたので『遠坂のみんなを護れ』と最後の令呪を使う。
その後色々あったわけだが、ギルガメッシュを倒した挙句に聖杯はゼパル・フルフルを使って愛のエネルギーをもらって魔力をもらって、黄金卿に取り込んで、黄金卿の中ですべての召喚を還して、一人アンリマユに焼き殺される最後…を書いていた。
今更だが設定がむちゃくちゃだなぁと思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5309y/

なんかもうどうでもよくなってきた

2011年11月18日06時13分発行